

トクヴィル著「アメリカのデモクラシー第一巻(下)」

岩波文庫、岩波書店 2005年12月16日刊を読む

## アメリカのデモクラシー

1. イギリス系アメリカの人種が将来広がって住むことになる領土は、ヨーロッパの四分の三に等しいと思う。連邦の気候は全体としてはヨーロッパより好ましい。自然の恵みはヨーロッパに劣らない。アメリカの人口が、いつの日か必ずやわれわれの人口に匹敵するであろうことは明らかである。
2. 多くの異なる国民に分かれたヨーロッパは、やむことなく繰り返される戦争と中世の野蛮状態を経ながら、一平方里当 410 人の住人を有するに至った。合衆国がいつかそれだけの人口をもつのを防げるほど強力な原因が何かあるだろうか。
3. アメリカのイギリス系人種のさまざまな末裔が共通の相貌を示さなくなるまでには何世紀もかかるであろう。新世界に人間が境遇の恒久的な不平等をうちたてる時が来るとは予想できない。
4. 平和か戦争か、自由か暴政か、繁栄か困窮か、こうした事情がイギリス系アメリカ人の一大家系のさまざまな子孫の間に将来どれほどの相違を生み出そうと、それらはすべて少なくとも似通った社会状態を保持し、その社会状態に由来する慣行と観念を共通にもつであろう。
5. 中世には宗教の絆だけで、ヨーロッパに住んでいたさまざまな人種を同じ一つの文明に統合するのに十分であった。新世界のイギリス人は他にも多くの絆で結ばれており、しかも万人が人間の平等化を求める世紀に生きている。
6. 中世は分裂の時代であった。当時は国民や地方の一つ一つ、都市や家族のそれぞれが独自性を著しく強める傾向にあった。今日では逆の動きが感じられ、諸国民は統一に向けて歩んでいるように見える。知的なつながりは地上のもっとも離れた部分を相互に結びつけ、人々は一日として互いに無縁なままではおられず、世界のどこの片隅に起こっていることも知らずには済まされまい。だからこそ、今日ヨーロッパ人と新世界におけるその子孫との間には、両者を隔てる大洋にもかかわらず、川一つ隔たるにすぎない 13 世紀の町と町ほどの違いも認められない。
7. もし、この同質化の動きが見知らぬ国民同士を近づけるとすれば、それは、より以上に強い理由で、同じ国民の子孫が互いに他人になることを防げるであろう。

8 . したがって、北アメリカに 1 億 5000 万人もの互いに平等で、すべて同じ種族に属する人間が見出される時がやってくるであろう。それらの人々は出発点を同じくし、同じ文明、同じ言語、同じ宗教、同じ習慣、習俗をもち、同じ色合いの思想が同じような形で彼らの間を流通するであろう。他のすべては疑わしいが、以上の点は確実である。しかも、これは世界にまったく新しい事実、その影響がどこまで及ぶか、想像するのも不可能な事実である。

9 . 今日、地球上に、異なる点から出発しながら同じゴールを目指して進んでいるように見える二大国民がある。それはロシア人とイギリス系アメリカ人である。

10 . どちらも人の知らぬ間に大きくなった。人々の目が他に注がれているうちに、突如として第一級の国家の列に加わり、世界はほぼ同じ時期に両者の誕生と大きさを認識した。

他のあらゆる国民はすでに自然の引いた限界にほぼ達しており、後は守るだけであるが、両者は成長の途上にある。他のあらゆる国民は引きとめられ、多大の努力を払わなければ前に進めないが、両者だけは軽やかにして速やかな足取りで行くべき道を歩き、その道がどこで終わるのか、未だに目に見えない。

11 . アメリカ人は自然がおいた障害と闘い、ロシア人は人間と戦う。一方は荒野と野蛮に挑み、他方はあらゆる武器を備えた文明と争う。それゆえ、アメリカ人の征服は農夫の鋤<sup>すき</sup>でなされ、ロシア人のそれは兵士の剣で行なわれる。

12 . 目的の達成のために、前者は私人の利害に訴え、個人が力を揮い、理性を働かせるのに任せ、指令はしない。

13 . 後者は、いわば社会の全権を一人の男に集中させる。

14 . 一方の主な行動手段は自由であり、他方のそれは隷従である。

15 . 両者の出発点は異なり、たどる道筋も分かれる。にもかかわらず、どちらも神の隠された計画に召されて、いつの日か世界の半分の運命を手中に収めることになるように思われる。

P416 ~ 419

[コメント]

アメリカは自由を目指し、ロシアは隷従を目指したというトクヴィル氏の指摘は、正に歴史的事実となった。アメリカ理解のための第一級の基本書(テキスト)。

- 2010 年 4 月 28 日 林明夫記 -